

## 本号のテーマ：「二つの能力」

評論家でもある外山滋比古氏は、「思考の整理学」という本の中で、グライダー人間と飛行機人間と題し次のように述べています。



空を飛ぶ乗り物に、飛行機とグライダーがある。両方とも、遠くから見ていると似ていて区別がつかない。グライダーが音もなく優雅に滑空している様子は、飛行機よりもむしろ美しいくらいである。だけれど、悲しいかな、グライダーは自力で飛ぶことはできない。

そして、そもそも人間には、グライダー能力と飛行機能力がある。受動的に知識を得るのが前者、自分で物事を発明・発見するのが后者である。両者は一人の人間の中に同居しているが、学校は、多くの場合グライダー人間を育てている。そこでは、生徒は自力で知識を獲得しているのではなく、生徒は、グライダーのように先生と教科書に引っ張られて勉強しているのだから、と。

さて、これをお読みの皆さんはどちらですか。飛行機人間ですか、グライダー人間ですか。

私は、コンピューターをはじめとする情報機器が発達しIT化が増々進むであろうこれからの現代社会では、まずその知識を教えられたとおりに習得するグライダー的能力が大いに必要とされるけれども、他方で、予測しがたい大災害や大不況が現実になっている先行き不透明な時代が到来していることに目をやると、情報を整理し、自分の頭で考えて、自分で進路を決めていく飛行機的能力が、非常に重要になると思っています。



そこで、学校教育の場で、ライダーにエンジンを搭載するにはどうしたらよいか、を考えてみます。私は、まず子どもには、世の中の美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見張る感性（センス・オブ・ワンダー）が備わっていることを大人が自覚し、それを大切に育てていくことが大事であり、そして、その感性は美しいものや新しいもの未知なものに触れた時に大きな感動となり、その感動は、やがてその対象への好奇心を呼び起こし、さらにその好奇心は探求心に繋がり、学ぶ意欲が沸き、自分の頭で考え、自分で行動を起こすことができる人間を育てるといった一連のプロセスを自覚し、大人がその機会を十分に子どもに提供することが大事なのではと考えています。

その意味で学校は、時間の制約がある中でも、子どもたちが美術館、博物館などで本物に触れる機会を持つことや学校外での体験活動等の機会を意識して設定する工夫や努力が求められるのだと考えています。